第2節　吉田構内（吉田遺跡）の調査

1．特高受変電設備棟新営工事に伴う本発掘調査・立会調査

調査地区　吉田構内P-16区

調査面積　200㎡

調査期間　平成23年5月9日～6月23日

調査担当　横山成己　松浦暢昌

調査結果

平成23年(2011)2月、施設環境部より吉田構内に特高受変電設備を新営する事業計画が大学情報機構に提出された（図4、写真7・8）。工事計画地周辺では、南に隣接する農学部連合獣医学科棟にて縄文時代の河川[註1]が、北に近接する農学部農場観測施設では古代の大型掘立柱建物跡が検出されている[註2]。今回の工事計画地においても埋蔵文化財が検出される可能性は極めて高く、新棟計画部分は本発掘調査が、配管部分は工事中の立会調査が妥当と判断されたため、その旨平成22年度第9回埋蔵文化財資料館専門委員会（平成23年2月16日開催：メール審議）に諮り、了承された。

【註】

1）豆谷和之（1994）「吉田構内農学部連合獣医学科棟新営に伴う発掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報ＸⅡ』,山口

2）河村吉行（1992）「吉田構内農学部農業環境観測実験施設新営に伴う発掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報Ｘ』,山口

図４　調査区位置図

写真７　調査区調査前全景（北西から）

写真８　調査前樹木伐採風景（南から）

（1）調査の経過（写真9～12）

設備棟建設予定地全域を対象とする本発掘調査は、平成23年(2011)5月6日（金）に事前工（安全フェンス・仮設ハウス設置）、座標杭設置、レベル移動を行った。重機掘削は5月9日（月）より着手し、間に3日間の雨天中止をはさみながら、5月16日（月）に旧耕土層（L2）上面までの掘削を終了した。

翌5月17日（火）からは人力による堆積層掘削を開始した。旧耕土（L2）、旧床土（L3）、自然堆積層

（遺物包含層：L4）、検出された河川堆積層（L5）の順に除去し、6月14日（火）までに掘削を終えた。6月15日（水）・17日（金）両日で完掘状況および調査区断面、遺構等の写真撮影を行い、各種測量も完了した。

埋め戻しは6月21日（火）より行い、23日（木）に全工程を終えた。

（2）基本層序（図6、写真17・18）

今回の調査では、現地表下2.6mまでの地層を確認した。基本層序は6層に大別される。以下、文章中では地層区分を「L○」と表記する。

L1は本学統合移転に伴う造成土層で、層厚は約110～150cmを測る。層中からは採土を行った場所に元来埋蔵されていたとみられる須恵器片や磁器片などの混入が見られるが、量は少ない。

L2はオリーブ褐色～暗灰黄色の極細粒砂質シルト層で層厚は最大で15cmである。上面は造成時に削平を受けているようであり、層厚は一定しないが、下面に残る耕作痕やほぼ均質な土質と植物の根の痕跡が見られることから、大学造成前の耕土遺存層と判断される。層中からは主として近世から近代の遺物が出土している。

L3はオリーブ褐色極細粒砂質シルト層であり層厚は約10cmとなる。上面に耕作痕と植物の根による酸化鉄がみられる。上面はほぼ水平となるが、層下位は傾斜が旧地形を明確に反映するため、本層は整地土層（旧床土）であると判断した。層中に包含される遺物は古代が主体を占めるが、近世陶磁も含まれるため、当地が耕地化された時期を伺い知ることができる。

L4は暗灰黄色～オリーブ褐色の極細粒砂質シルトと、細～中礫混りシルト質極細粒～細粒砂の2層に大きく分類ができる。前者の層厚はおよそ5～30cmを測り、後者は5～20cmを測る。後者の礫混り層が高所を除いて全域に分布するが、総体的にラミナは見られず河川埋没（L5堆積）後の自然堆積と考えられる。層中に包含される遺物は古代から中世後期までが主体を占める。

L5は黒色～オリーブ黒色のシルト質極細粒砂～粘土質シルトと、暗灰黄色や褐色の砂礫の中礫～中流砂、シルト質砂などからなる自然河川の埋土でラミナが多く見られる。層厚は最大で50cmを測る。粘土やシルト層は暗色を呈しており、層中に植物遺体を含む。流路内北側では流路とほぼ直行方向で杭列が検出されている。層中に包含されている遺物の主体は、古代後半期から中世初頭とある程度のまとまりを見せる。

L6はオリーブ黒色～灰色シルト混り細粒砂～中礫層で最大層厚は60cm以上となる。北東と南西に微高地を形成し、自然河川の下部へと続いている。層上面清掃中に石鏃1点を検出したが、調査区側溝断ち割り部においては明確な遺物を確認することができなかった。調査では当地層を地山と判定したが、縄文時代以前の堆積層である可能性は否定できない。[註1]

【註】

1）調査終了後の平成23年(2011)11月13日、新営建物基礎工事（現地表下約7mの掘削）が実施されたため、立会調査を実施した。その結果、L6は層厚約1.2mの堆積であり、下位に5m以上の岩盤風化層が存在することが確認された。基礎坑が素掘りであり、安全性が確保されないことから断面精査は実施しなかったが、目視した限りでは下位に遺構は存在せず、L6が遺物包含層である確証も得られなかった。

（3）遺構（図5）

自然河川、ピット、杭列が確認された。

自然河川（写真17・18）

調査区中央やや東寄りに、南東から北西に走る自然河川を検出した。測量により河床が調査区内で緩やかに北西に傾斜することが分かるが、人体の感覚で感じられるほどのものではない。河川幅は調査区中央寄りで最も狭く、2.2mを測る。上流である南東部はやや広がり、幅3.4mを測る。深さは最深部で約0.7mであるが、河川の下位にもぐる堆積層L6上面が河川沈殿物などにより変質しているため、厳密な河床を特定するのは困難であった。埋積土（L5）は複雑で、一定期間流水と淀みが繰り返されたものと推測される。堆積土からは、平安時代後期から中世初頭にかけての土師器埦・坏類などが出土している。

ピット（写真13）

調査区内で確認されたピットは1基のみであり、調査区中央西よりに検出した。Pit1は地山（L6）北東傾斜地に設けられており、平面形は長軸60㎝、短軸52㎝の楕円形で、深さは32㎝を測る。当ピットは河川埋積土（L5）の下位より検出したものである。遺構埋土は均質で、暗灰黄色(2.5Y5/2)強粘質土である。埋土内からは、土師器埦2点が出土している。

杭列（写真14）

調査区北側西寄りの自然河川河床に、南西－北東方向に並ぶ杭列を確認した。およそ0.5m間隔で杭3本が1組となるように配されており、水流に対し直交することから堰としての機能が考えられるが断定できない。

以上が調査区内に検出された遺構の全てである。吉田遺跡では、護岸用と考えられる杭列は複数箇所で検出されているが、河川の走向方向に直交する杭列は確認例がなく、本件が初出である。ピットとの関係については、近接することから一連の構造物とも考えられるが、河川対岸を未検出であるため憶測を控えたい。

（4）遺物（図7～9、写真19～21、表2・3）

ここでは、基本層序に従って出土遺物を報告する。なお、L4およびL5は可能な限り細分した層位で遺物の取り上げを行ったが、堆積状況が複雑であったため厳密な意味では出土層位を保証できない。表では細分層（L○－○）まで明記したが、ここでは基本層序で一括する。

L1

1は須恵器皿の口縁－底部片。小片であるが底部稜線から径を復元した。平底の底部から外開きに体部が立ち上がるが、わずかに外反する。口縁端部は丸く収める。復元口径22.8㎝、復元底径18.6㎝、器高2.6㎝を測る。

L1からは他に弥生土器と思われる底部付近の小片が出土しているが、ここでは報告を省く。

L2

2は須恵器坏蓋の小片である。端部復元口径は11.8㎝、かえり径は10.2㎝であり坏G蓋と見られる。残存高2.1㎝。

3～**6**は陶器。**3**は香炉蓋と見られる陶器蓋の天井－口縁部片。外面天井部は露胎で口縁のみ灰釉がかかるが自然釉の可能性がある。**4**は陶器皿の口縁－体部片。復元口径11.5㎝を測る。内面から口縁外面には灰釉がかかるが、体部外面は露胎。**5**は陶器碗底－体部片。復元高台径4.2㎝、残存高1.65㎝を測る。内面および体部外面は灰釉がかかり、底部は高台畳付まで鉄釉がかかる。**6**は陶器擂鉢口縁部片。内面には残存部に7条の卸目が確認される。口縁端部外面を断面台形状に肥厚させており、全面

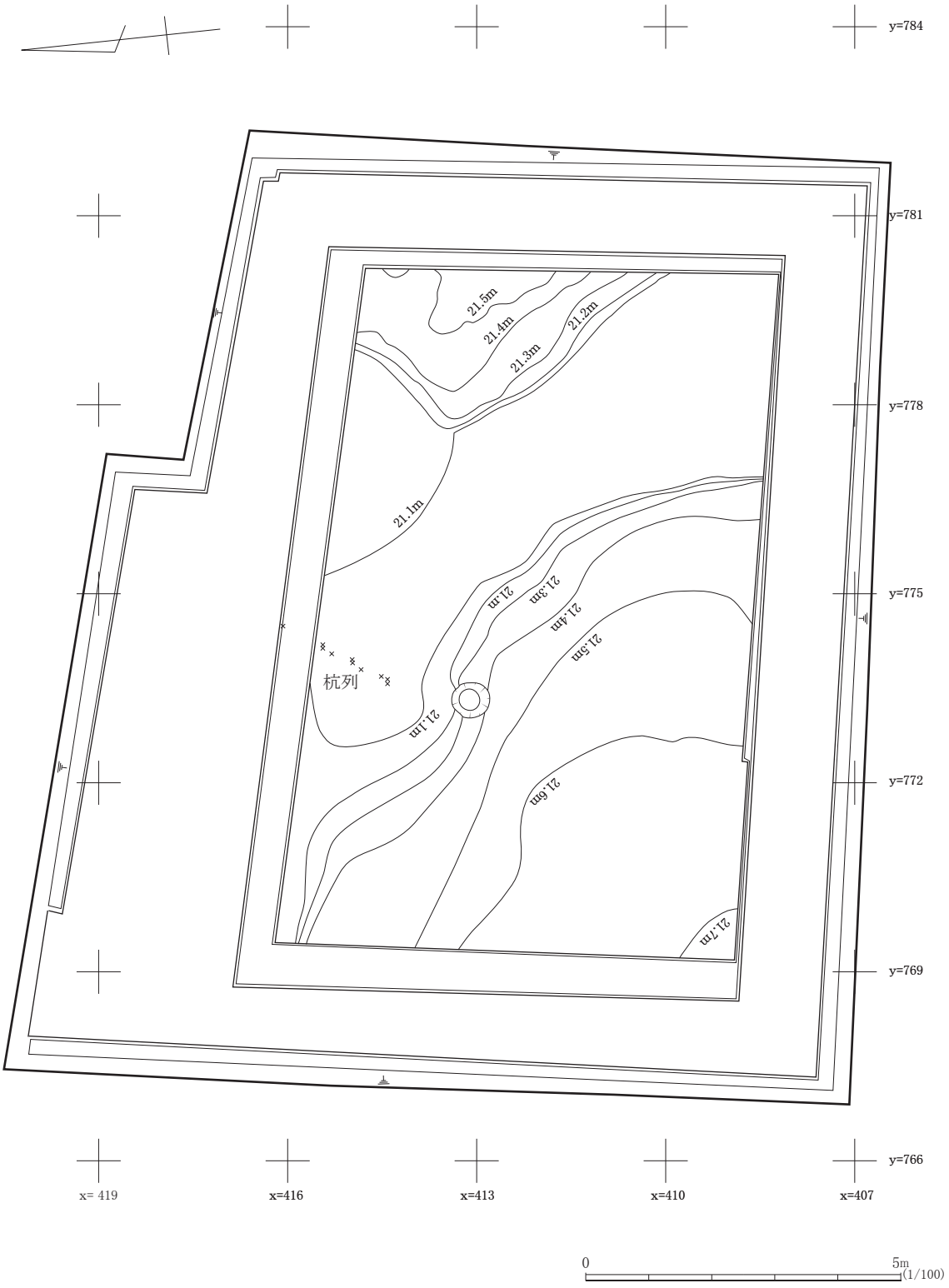
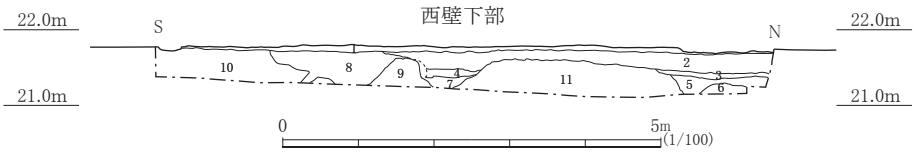

y=784
y=781
y=778
y=775
y=772
y=769
y=766
x= 419
x=416
x=413
x=410
x=407
21.5m
21.4m
21.3m
21.2m
21.1m
21.3m
21.4m
21.5m
21.1m
21.6m
21.7m
杭列
0
5m
(1/100)

図5 調査区平面図

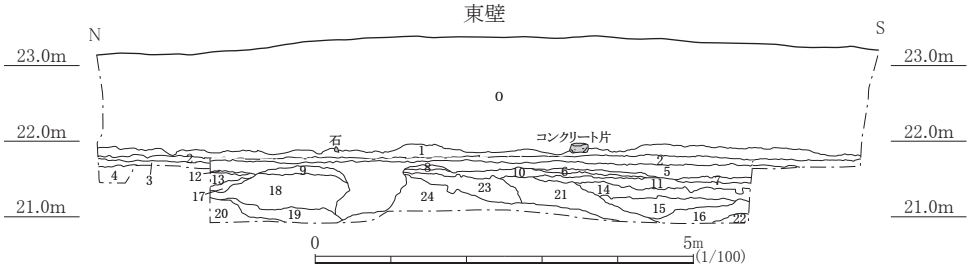


【L3】
1 オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質極細粒砂（細礫少量含む）

【L4】
2 暗灰黄色(2.5Y4/2)含細礫シルト
3 暗オリーブ色(5Y4/3)細～中礫混り極細粒～細粒砂
4 暗灰黄色(2.5Y4/2)含粘土細粒砂（細～中礫を一部含む）

【L5】
5 オリーブ黒色(5Y3/1)シルト質極細粒砂
6 オリーブ黒～灰色(7.5Y3.5/1)細～大礫混り極細粒砂
7 暗灰黄色(2.5Y4/2)粘土混りシルト質極細粒～細粒砂

【L6】
8 灰オリーブ色(7.5Y4/2)シルト混り極細粒砂～暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)シルト質極細粒砂～中礫
9 暗オリーブ色(5Y4/4)粘土混り極細粒～粗粒砂と細礫・中礫
10 灰オリーブ色(5Y4/2)極細粒砂～中礫
11 暗オリーブ色(5Y4/4)粘土混り極細粒～粗粒砂と細礫・中礫



【L1】
0 造成土

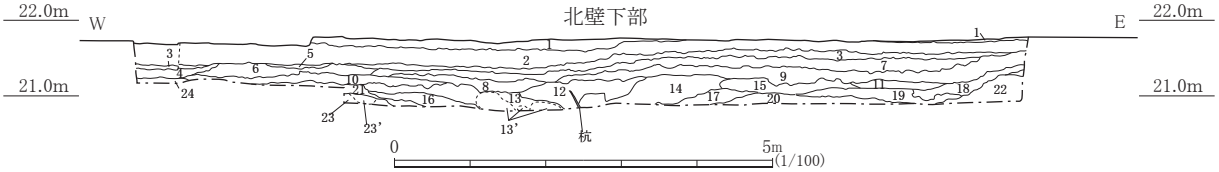
【L2】
1 オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト（細礫少量含む）

【L3】
2 オリーブ褐色(2.5Y4/4)極細粒砂質シルト

【L4】
3 暗灰黄～オリーブ褐色(2.5Y4/2~3)極細粒砂質シルト
4 灰オリーブ色(5Y4/2)細～中礫質細粒～極細粒砂
5 暗灰黄～オリーブ褐色(2.5Y4/2.5)極細粒砂質シルト
（粗粒砂～細礫含む）
6 暗灰黄色(2.5Y4/2)極細粒砂
7 暗灰黄～オリーブ褐色(2.5Y4/2.5)
極細粒砂質シルト（細礫含む）
8 オリーブ褐色(2.5Y4/4)シルト質極細粒砂（細～中礫多く含む）
9 オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質極細粒砂（細～中礫多く含む）
10 暗灰黄色(2.5Y4/2)極細粒砂質シルト（極粗粒砂少量含む）
11 オリーブ黒色(5Y3/2)中粒砂～中礫混りシルト質細粒砂

【L5】
12 灰色(5Y4/1)細～中礫混りシルト質極細粒砂
13 オリーブ黒色(5Y3/1)シルト質極細粒砂
14 オリーブ黒色(5Y3/2)シルト質極細粒砂
（灰オリーブ色極細粒砂偽礫少量含む）
15 黒褐色(2.5Y3/2)粗粒～極細粒砂
16 黒褐色(2.5Y3/1)粘土混り極細粒砂
17 黒色(2.5Y2/1)粘土混り極細粒砂

【L6】
18 暗灰黄色(2.5Y4/2)粗粒砂混りシルト質極細粒砂
19 オリーブ黒色(5Y3/2)極細粒砂（粗粒砂極少量含む）
20 オリーブ黒色(5Y3/2)～灰オリーブ色(5Y4/2)
含粘土中粒～細礫混り細粒～極細粒砂
21 暗オリーブ褐～オリーブ褐色(2.5Y3.5/3)
細～中礫混り中粒～極粗粒砂
22 暗灰黄色(2.5Y4/2)細～中礫混り中粒～極粗粒砂
23 灰オリーブ色(5Y5/2)シルト～シルト質極細粒砂
24 オリーブ灰色(2.5GY5/1)極細粒～粗粒砂



【L3】
1 オリーブ褐色（2.5Y3.5/1）シルト質極細粒砂（細礫少量含む）

【L4】
2 暗灰黄色（2.5Y4/2）極細粒砂質シルト（細礫少量含む）
3 灰色(5Y4/1)細～中礫混りシルト質極細粒砂

【L5】
4 オリーブ黒色(5Y3/1)シルト質極細粒砂
5 灰色(5Y4.5/1)極細粒～細粒砂
6 暗オリーブ色(5Y4/4)細～大礫混り細粒～極粗粒砂
7 灰色(5Y4/1)含粗粒砂シルト質極細粒～細粒砂
8 暗灰黄色(2.5Y4/2)極細粒～細粒砂（中礫含む）
～黒褐色(2.5Y3/1)粘土質シルト
9 オリーブ黒色(5Y3/1)シルト質極細粒砂（粗粒砂少量含む）
10 オリーブ黒色(5Y3/1)極細粒砂混り粘土質シルト
11 黒色(5Y2/1)極細粒砂
12 黒～オリーブ黒色(5Y2.5/1)極細粒～細粒砂混り粘土質シルト
13 黒色(5Y2/1)極細粒砂質シルト
13'オリーブ黒色(5Y3/1~2)粘土
14 暗灰黄色(2.5Y4/2)粗粒砂質シルト
～オリーブ黒色(5Y3/1)シルト質極細粒砂
15 褐色(7.5YR4/4)中粒砂～中礫
～灰黄褐色(10YR4/2)細粒～極粗粒砂
16 黒～オリーブ黒色(7.5Y2.5/1)シルト質極細粒砂
17 黒～オリーブ黒色(5Y2.5/1)極細粒砂
18 黒色(2.5Y2/1)粘土質極細粒砂
19 暗灰黄色(2.5Y4/2)極細粒～細粒砂

【L6】
20 オリーブ黒～灰色(7.5Y3.5/1) 細～大礫混り極粗粒砂
21 オリーブ黒～灰色(7.5Y3.5/1) 細～大礫混り極粗粒砂
22 オリーブ黒色(5Y3/2)含粘土粗粒砂混り細粒～極細粒砂
～灰オリーブ色(5Y4/2)中粒砂～細礫
23 灰色(10Y4/1)～暗オリーブ灰色(5GY4/1)極細粒砂質シルト
23'灰色（7.5Y4/1）粗粒砂混り極細粒砂質シルト
24 オリーブ黒～灰色(7.5Y3.5/1) 細～大礫混り極粗粒砂

図6 調査区土層断面図

写真9　重機掘削の模様（南東から）

写真10　旧床土（L3）検出状況（南東から）

写真11　河川堆積土（L5）検出状況（南東から）

写真12　河川堆積土（L5）掘削状況（北西から）

写真13　ピット完掘状況（北から）

写真14　河川底面に検出された杭列（南から）

写真 15　完掘状況（南東から）

写真 16　完掘状況（南西から）

写真17　調査区東壁-南壁土層断面（北西から）

写真18　調査区北壁土層断面（南から）

に鉄釉がかかる。

このほか、L2からは須恵器、土師器、瓦質土器、青磁、瓦、横櫛などが出土しているが、いずれも小片である。

L3

7は磁器小鉢の口縁－体部片。口縁内端部に太い圏線が1条巡らされる。復元口径9.6cmを測る。

8～10は須恵器。8は須恵器埦口縁－体部片。やや内湾する体部から口縁は短く外反する。体部にロクロ水引痕が明瞭に残る。小片のため口径復元不能。9・10は須恵器坏口縁部片。9は口縁端部を尖り気味に丸く収め、10は口縁端を短く外反させる。両者とも小片であり口径復元不能。

L3からはこのほか土師器片、須恵器体部片などが出土しているが、いずれも図化不能である。

L4

11～18は土師器。11は埦口縁－体部片。体部は緩やかに内湾し、口縁を軽く外反させる。口縁端部は丸く収める。器面の風化が著しいが、ロクロ水引痕がわずかに観察される。復元口径13.0cmを測る。12は高高台の皿底部片。復元高台径7.4cm、残存高2.5cmを測る。底部外面に糸切り痕が残る。13は坏底－体部片。底部には回転糸切り痕が残り、底部外端に形骸化した断面三角形の低い高台が付加される。内面は横および斜め方向に丁寧にミガキが施されている。他の土師器と異なり胎土に金雲母が多く含まれている。復元高台径6.6cm、残存高2.85cm。14～16は坏。いずれも底部に糸切り痕が残る。15は完形復元可能な個体で、体部はあまり開かずに直線的に立ち上がる。口縁部はやや肥厚している。外面焼成痕により重ね焼かれた状況が分かる。復元口径12.2cm、底部径5.6cm、器高4.65cm。16は15に比して器壁が薄いが、同様にあまり開かずに直線的に立ち上がる。復元底部径7.4cm、残存高3.2cmを測る。17は皿の口縁－底部片。口縁の立ち上がりは短く、端部は丸く収める。復元口径7.5cm、復元底部径5.6cm、器高1.1cm。18は土師器坏口縁部片。直線的な口縁で、端部は丸く収める。小片のため口径復元不能。

19～21は瓦質土器。19は火鉢口縁－体部片。小片のため口径復元不能であるが、浅鉢形と見られる。口縁端部外端はヨコナデにより面を取り、内端は蒲鉾形に肥厚させる。口縁外面下に「米」字状のスタンプを連続して施す。20は擂鉢。体部下端の破片と見られるが、底部は剥離している。内面の卸目は7条が遺存する。21はやや須恵質焼成の足鍋脚部片。脚部上位の破片と見られ、内面に明瞭に指圧痕が残っている。

22～27は須恵器。22は蓋の天井－口縁部片。口縁端部および天井中央部を欠失している。扁平な蓋であり、調整は外面口縁および天井外方は回転ナデ、他はナデを施す。23は高台付き坏の底－体部片。復元高台径は7.6cm、残存高2.1cmを測る。底部外端に断面逆台形の小ぶりな高台が付き、高台端部全面で接地する。底部外面はヘラ起こし未調整である。24も高台付き坏の底部片。焼成不良品である。底部外端に高台が付くが、端部は欠失しており、部分的に底面から剥離している。25は壷類の底部片。小片であるが、高台剥離痕から径を復元した。器壁の厚い個体であり、底部外面外端には幅太の高台が剥離した痕跡を残す。26は高坏裾部片。復元裾部径9.2cm、残存高0.65cmを測る。脚部から屈曲気味に外方に開き、端部を下垂させている。27も高坏裾部片である。26と同様の形態であるが、裾端部および下垂部が丸みを帯びる。

45は打製凹基石鏃。先端部と基部の一部を欠失する。基部の抉りが深く、側縁部の摩耗が顕著である。風化のため稜線が明確でないが、一部に主要剥離面が観察される。残存長1.86cm、幅1.46cm、厚さ0.33cm、重量0.58g。サヌカイト製と見られる。

このほか、L4からは須恵器甕、土師器甕、土師器壺、白磁碗、瓦質土器捏ね鉢などバラエティーに富んだ資料が出土しているが、いずれも体部小片であることから、ここでは図示しない。

L5

河川埋積土から出土した資料を報告する。

28～38は土師器。28は完形復元可能な高台付き埦。底部から体部が大きく開き内湾して上がり、口縁はわずかに外反する。口縁端部は鈍く面を取る。体部内面は単位は観察できないが丁寧にミガキが施されている。外面調整は口縁部付近が回転ナデ、他は不定方向のナデ。底部外端やや内側に丸みを帯びた断面三角形状のこぶりな高台が付く。底部外面はナデが施される。復元口径16.0cm、高台径5.6cm、器高5.8を測る。調査区北西部最上層からの出土である。29は高台付き埦の底－体部片。26と同様底部から体部が大きく開き内湾して立ち上がる。底部外端に丸みを帯びた三角形状の高台が付く。体部内面は縦方向に緻密なミガキが、外面は丁寧にナデが施されており、底部外面もナデが施される。高台径5.4cm、残存高2.6cm。30は埦の底部片。強く内湾する底部の外端に長い高台が付く。底部内面および高台外面はナデ、高台内面は回転ナデ調整が施される。底部外面は摩耗が著しい。復元高台径6.4cm、残存高1.1cmを測る。31も高台付き埦底部片。底部外端に幅太で低い高台が付く。内面は風化で調整が判別できないが、外面にはナデが施されている。復元高台径6.8cm、残存高1.5cm。32は坏底部片。円盤高台で、底部外面に糸切り痕が残る。復元底部径6.0cm、残存高1.2cmを測る。33も円盤高台の坏底部。こちらは底部外面にナデが施される。復元底部径5.7cm、残存高1.25cmを測る。34はここでは土師器坏底－体部片として報告するが、須恵器の焼成不良品である可能性も残す。平底の底部から体部はあまり開かずに直線的に立ち上がる。体部内外面とも回転ナデ調整を施す。復元底部径11.0cm、残存高2.6cm。35・36は埦口縁部片。いずれも小片のため、口径復元不能な資料である。35は内湾気味の体部で口縁は軽く外反させ、口縁端部は丸く収める。ロクロ水引痕が明瞭に残る。36は直線的に体部が開く個体で、坏の可能性もある。口縁端部は尖り気味に丸く収める。内外面とも回転ナデが施される。37はここでは皿の口縁部片としておく。体部が大きく開く個体と見られ、口縁端部は丸く収める。小片のため口径復元不能。38は甕の口縁部片。直線的に軽く外傾する口縁で、端部は尖り気味に丸く収める。小片のため口径復元不能。

39～41は須恵器。39は高台付き坏の底－体部片。坏としては器壁の厚い個体である。体部は開かず直立気味に立ち上がるが、口縁付近で外反するものと思われる。体部内外面とも回転ナデ調整が施される。底部外端に断面逆台形の高台が開き気味に付き、高台内端部で接地する。復元高台径9.2cm、残存高3.55cmを測る。40は蓋の口縁部片。扁平な器形の蓋で、口縁部をほぼ垂直に下垂させ、端部は丸く収める。小片のため口径復元不能。胎土は精緻で、焼成も良好の優品である。41は瑯の口縁部片。外面口縁下に断面三角形の小さな突帯を巡らす。下位には波状文が施される。口縁端部は鈍く面取りを行っている。小片のため口径復元不能。

Pit1

埋土からは42・43のみが出土している。42は完形復元可能な土師器埦である。大きく外方に開き緩やかに内湾する体部を有し、口縁端部は丸く収める。底部外端に丸みを帯びた断面三角形状の高台が付く。内面は風化が著しく調整の観察が困難であるが、底部から体部下位までミガキが施されているようである。上位から口縁にかけては回転ナデ。外面は口縁付近に回転ナデ、下位はナデが施される。底部には回転糸切り痕が明瞭に残る。復元口径15.2cm、高台は歪みがあるが径5.6cm程度、器高4.9cmを測る。43は平底の土師器埦。接合しないが同一個体の底－体部と口縁部片が存在する。38と異なり無高

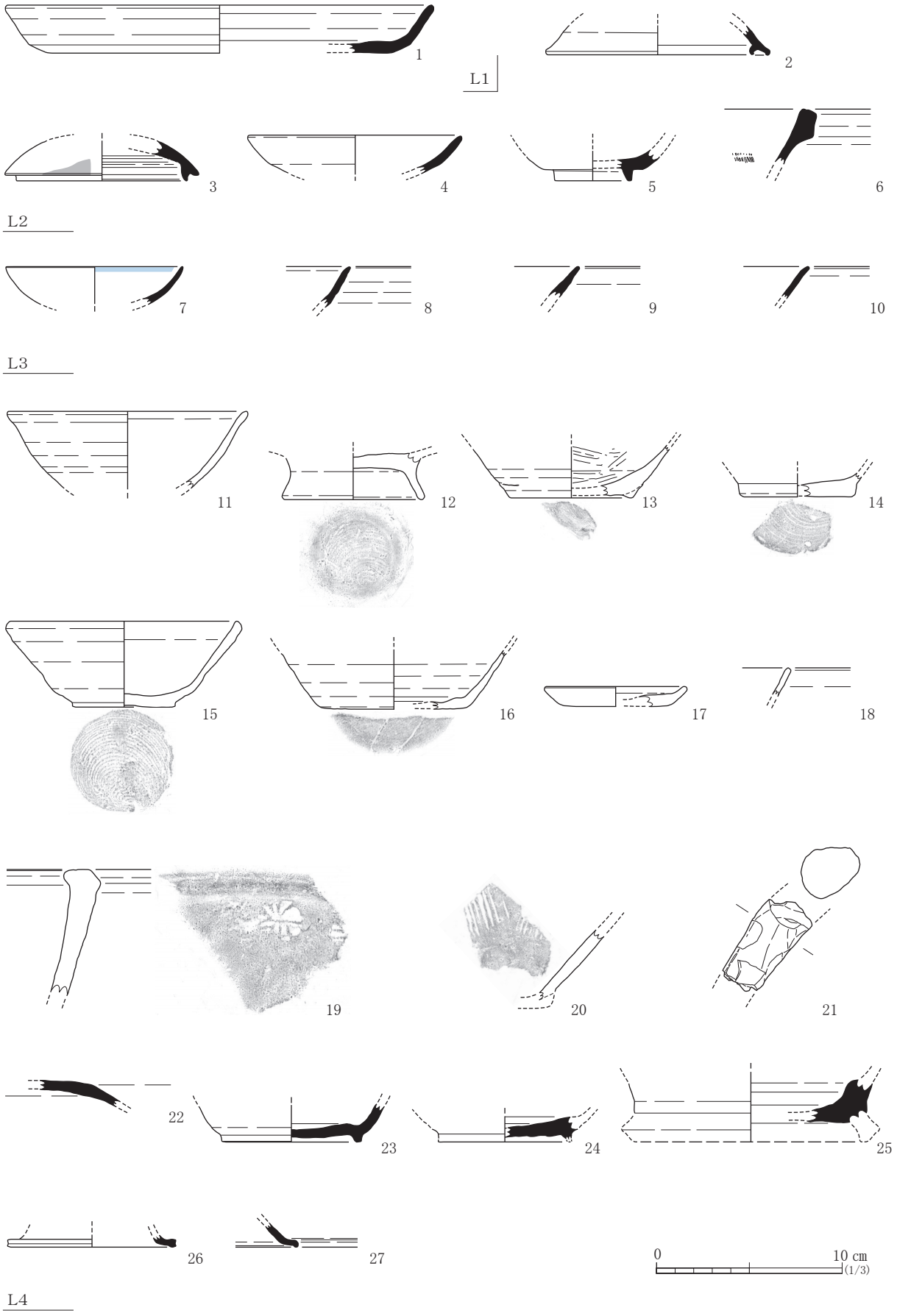


図7　出土遺物実測図①

台であり、上げ底気味の底部であるが、体部から口縁部にかけての器形はほぼ同一と言って良い。体部内面と口縁から体部中位までの外面に回転ナデ、底部内面と体部外面下位にナデが施される。底部外面には糸切り痕が明瞭に残る。図上では口径と器高を復元したが、接合不能な資料であり根拠はない。底部径5.6cmを測る。

L5からはこのほか各器種の体部片が出土しているが、ここでは図示しない。いずれも土師器または須恵器である。

L6（地山）

層上面精査中に石鏃1点を確認した。44は打製凹基石鏃。基部の一部を欠失するが、ほぼ完形品である。45に比して基部の抉りが浅い。こちらも風化のため稜線が明確でないが、片面に主要剥離面が観察される。残存長1.68cm、幅1.38cm、厚さ0.28cm、重量0.47g。サヌカイト製と見られる。

（4）本発掘調査小結

今回の調査では、遺構の分布は希薄であったが、調査区内に自然河川と堰状杭列、杭列に近接してピット1基が検出された。

当館の既往の調査では、南西に近接する連合獣医学研究科棟敷地において北東から南西に走ると見られる縄文時代の埋没河川が確認されている[註1]ため、走向から当調査地においてもその上流が検出されるものと予想されたが、方向を互いにする南東から北西に走る自然河川が確認されたことは想定外であった。

河川埋積土（L5）出土遺物から見ると、古墳時代の遺物が少量混ざるものの、10世紀から12世紀に所属する遺物が主体である。埋積土上層から12世紀代と見られる土師器椀（28）が出土しており、また河川埋積土に覆われたPit1からもあまり時期差の見られない土師器椀（42・43）が出土していることから、当河川の存続期間はそれほど長くなかったものと考えられる。また、平成12年(2000)に調査地の南東300m地点で実施された総合研究棟新営に伴う試掘調査[註2]では、同じく南東から北西に走る河川が検出されている。埋積土から円面硯などが出土していることから平安時代の河川と推定されており、当調査区で確認された河川との関係が注目される。

その他、河川方向に直交する状態で床面に打たれた堰の可能性がある杭列の存在にも注意したい。これまで吉田遺跡において検出された谷および河川に杭列が設けられている場合は、護岸のためと認識されてきた。平成21年(2010)に実施した農学部附属動物医療センター改修Ⅲ期工事にともなう本発掘調査において古代の埋没谷を検出したが、確認されたのはやはり護岸と見られる杭列であった[註3]。今回の発見により、同時期の谷または河川に同様の施設が存在する可能性が生じたことになる。自然地形といえどもトレンチ調査による安易な確認はできる限り避けるべきであろう。

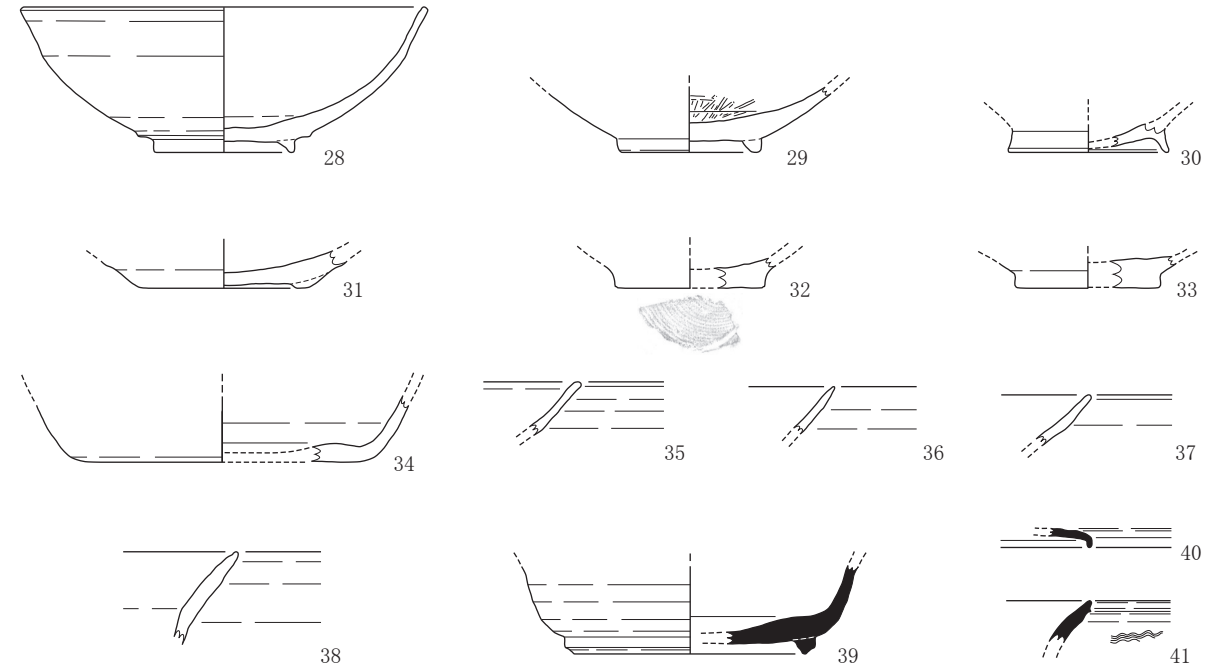
なお、当調査区周域には水田が広がり空閑地も多い。今後の整備計画等にも注意すべきである。

【註】

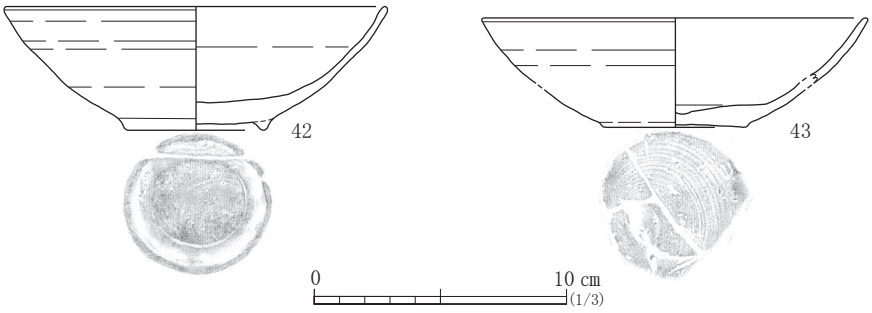
1）豆谷和之（1994）「吉田構内農学部連合獣医学科棟新営に伴う発掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報ＸⅡ』,山口

2）田畑直彦（2004）「平成12年度山口大学構内遺跡調査の概要」,山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報ＸⅥ・ＸⅦ』,山口

3）横山成己（2012）「農学部附属動物医療センター改修Ⅲ期工事に伴う本発掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成20年度－』,山口

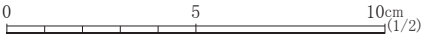


L5



Pit1

44 はL6上面、45 はL4中層出土



石器

図8　出土遺物実測図②

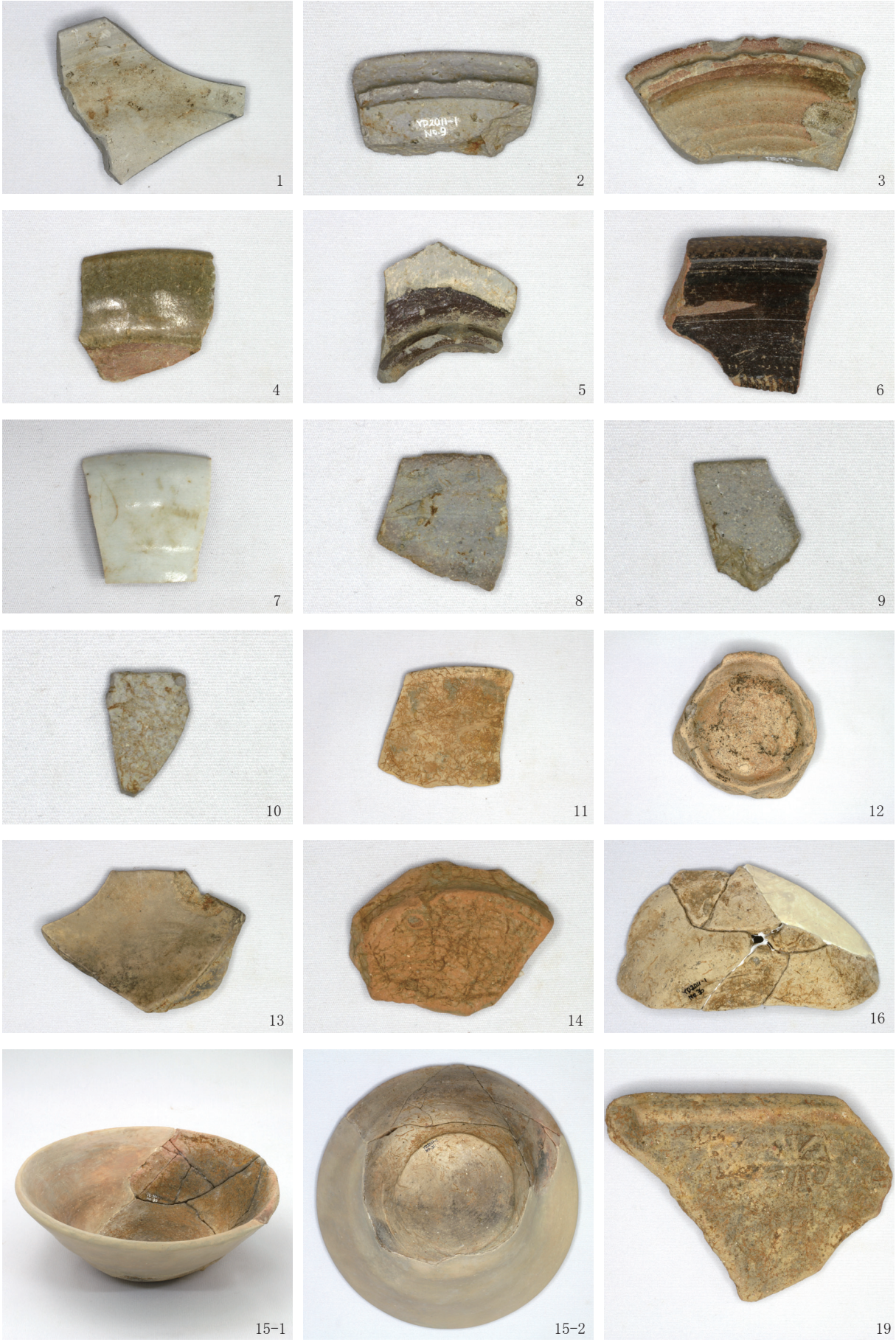


写真19　出土遺物①

17

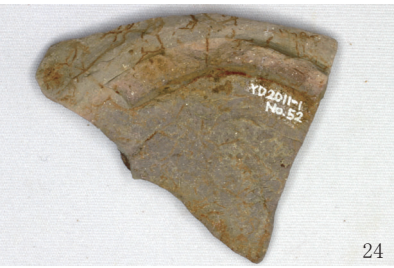
18

20

21

22

23

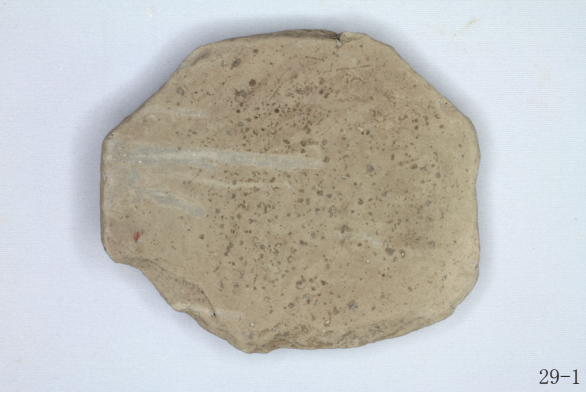


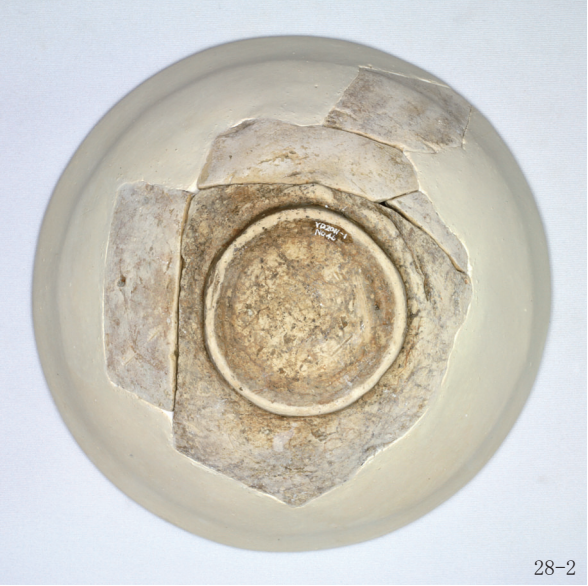
24

25

26

28-1


29-1


28-2

29-2

写真20　出土遺物②

27

YD2011-1
No.53
30

31

YD2011-1
No.67
32

33

YD2011-1
No.62
34

35

36

37

38

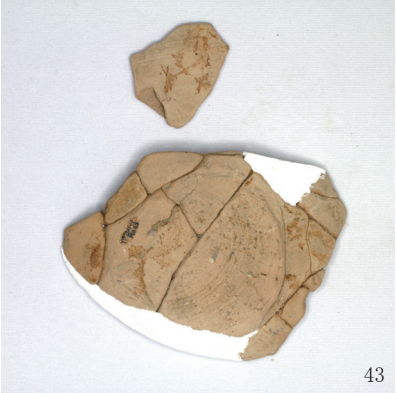
YD2011-1
No.62
39

40

41

42-1

42-2


43

44

45

写真21　出土遺物③

表2 出土遺物（土器）観察表

法量（ ）は復元値

遺物番号	遺構・層位	器種	部位	法量（cm）①口径②底径③器高	色調 ①外面 ②内面	胎土	備考
1	L1	須恵器 皿	口縁部～底部	①(22.8) ②(18.6) ③2.6	①灰色(N6/) ②灰白色(7.5Y7/1)	密:0.1～2mmφの砂粒少量混ざる	
2	L2	須恵器 坏蓋	口縁部	①(11.8)	①②灰白色(N7/)	密:0.1～1mmφの砂粒極少量混ざる	
3	L2	陶器 蓋	口縁部	①(9.2)	素地 灰白色(2.5Y7/1) 釉 灰黄色(2.5Y7/2)	精緻	香炉蓋か外面部分的に灰釉
4	L2	陶器 皿	口縁部	①(11.5)	素地 にぶい橙色(5YR6/3) 釉 灰オリーブ色(7.5Y6/2)	密:0.1～0.2mmφの砂粒極少量混ざる	
5	L2	陶器 碗	底部	②(4.2)	素地 灰白色(7.5Y7/1) 鉄釉 暗赤褐色(2.5YR3/3) 灰釉 灰白色(7.5Y8/1)	精緻	
6	L2	陶器 擂鉢	口縁部		素地 にぶい橙色(2.5Y6/3) 釉 暗赤灰色(2.5YR3/1)	精緻	
7	L3	磁器 小鉢	口縁部	①(9.6)	①②灰白色(2.5GY8/1) コバルト 明青灰色(5B7/1)	精緻	
8	L3	須恵器 埦	口縁部		①灰白色(N7/) ②灰白色(5Y7/1)	密:0.1～1mmの砂粒少量混ざる	
9	L3	須恵器 坏	口縁部		①②灰白色(7.5Y7/1)	密:0.1～0.5mmの砂粒少量混ざる	
10	L3	須恵器 坏	口縁部		①②灰白色(N7/)	密:0.1～1mmφの砂粒極少量混ざる	
11	L4-2	土師器 埦	口縁部	①(13.0)	①淡黄色()2.5Y8/3) ②にぶい黄橙色(10YR6/4)	密:0.1～0.5mmφの砂粒極少量混ざる	
12	L4-2	土師器 皿	底部	②(7.4)	①②浅黄橙色(10YR8/3)	密:0.1～7mmφの砂粒少量混ざる	糸切り痕
13	L4-2	土師器 坏	底部	②(6.6)	①②浅黄色(2.5Y7/3)	密:0.1～3mmφの砂粒少量混ざる、金雲母混	糸切り痕
14	L4-2	土師器 坏	底部	②(6.3)	①橙色(7.5YR7/6) ②にぶい黄橙色(10YR7/4)	0.1～1mmφの砂粒極少量混ざる	糸切り痕
15	L4-2	土師器 坏	口縁部～底部	①12.2 ②5.6 ③4.65	①上部 灰黄色(2.5Y7/2) 下部 淡黄色(2.5Y8/3) ②黄灰色(2.5Y5/1)	密:0.1～0.5mmφの砂粒少量混ざる	糸切り痕
16	L4-2	土師器 坏	底部	②(7.4)	①②灰白色(2.5Y8/2)	密:0.1～2mmφの砂粒少量混ざる	糸切り痕
17	L4-1	土師器 皿	口縁部～底部	①(7.5)②(5.6) ③1.1	①②浅黄橙色(7.5YR8/6)	密:0.1～0.2mmφの砂粒極少量混ざる	
18	L4-2～4	土師器 坏	口縁部		①②淡黄色(2.5Y8/3)	精緻	
19	L4-1	瓦質土器 火鉢	口縁部		①浅黄色(2.5Y7/4)～黄灰色(2.5Y6/1) ②明黄褐色(10YR7/6)	密:0.1～3mmφの砂粒少量混ざる	
20	L4-2	瓦質土器 擂鉢	体部		①②灰白色(2.5Y8/2)	密:0.1～1mmφの砂粒少量混ざる	
21	L4-3	瓦質土器 足鍋	脚部		灰白色(2.5Y7/1)	密:0.2～5mmφの砂粒少量混ざる	
22	L4-2	須恵器 蓋	体部		①②灰白色(2.5Y7/1)	密:0.1～1mmφの砂粒少量混ざる	
23	L4-2	須恵器 坏	底部	②(7.6)	①②灰白色(N7/)	密:0.1～1mmφの砂粒少量混ざる	
24	L4-2	須恵器 埦	底部		①②にぶい黄橙色(10YR7/3)～黄灰色(2.5Y6/1)	密:0.1～0.5mmφの砂粒少量混ざる	
25	L4-2	須恵器 壺	底部		①②灰白色(N7/)	密:0.1～1mmφの砂粒少量混ざる	
26	L4-3	須恵器 高坏	脚部	②(9.2)	①②灰白色(2.5Y8/1)	密:0.1～1mmφの砂粒極少量混ざる	
27	L4-1	須恵器 高坏	脚部		①②灰白色(2.5Y8/1)	密:0.1～2mmφの砂粒極少量混ざる	
28	L5-1	土師器 埦	口縁部～底部	①(16.0) ②5.6 ③5.8	①灰白色(10YR8/1) ②淡黄色(2.5Y8/3)	密:0.1～1mmφの砂粒少量混ざる	
29	L5-5	土師器 埦	底部	②5.4	①②浅黄色(2.5Y7/3)	精緻:0.1～0.4mmφの砂粒極少量混ざる	
30	L5-2～3	土師器 埦	底部	②(6.4)	①灰黄色(2.5Y7/2) ②にぶい黄橙色(10YR7/4)	密:0.1～1mmφの砂粒極少量混ざる	

遺物番号	遺構・層位	器種	部位	法量(cm) ①口径②底径③器高	色調 ①外面　②内面	胎土	備考
31	L5-2	土師器　埦	底部	②(6.8)	①灰黄色(2.5Y7/2) ②黄灰色(2.5Y5/1)	やや粗:0.1～1.5mmφの砂粒やや多く混ざる	
32	L5-2～3	土師器　坏	底部	②(6.0)	①灰色(5Y6/1) ②灰白色(5Y7/1)	密:0.1～0.5mmφの砂粒極少量混ざる	糸切り痕
33	L5-1	土師器　坏	底部	②(5.7)	①②浅黄色(2.5Y7/3)	密:0.2～1.5mmφの砂粒少量混ざる	
34	L5-2～3	土師器　坏	底部	②(11.0)	①②浅黄色(2.5Y8/3)	密:0.1～1mmφの砂粒少量混ざる	
35	L5-1	土師器　埦	口縁部		①②浅黄色(2.5Y8/3)～ にぶい黄橙色(10YR6/4)	精緻	
36	L5-2～3	土師器　埦	口縁部		①②灰黄色(2.5Y7/2)	密:0.1～0.3mmφの砂粒極少量混ざる	
37	L5-2	土師器　皿	口縁部		①②にぶい橙色 (7.5YR6/4)	密:0.1～0.5mmφの砂粒極少量混ざる	
38	L5-2～3	土師器　甕	口縁部		①②にぶい黄褐色 (10YR5/3)	やや粗:0.2～2mmφの砂粒多く混ざる	
39	L5-2～3	須恵器　坏	底部	②(9.2)	①②青灰色(10BG5/1)	密:0.1～1mmφの砂粒やや多く混ざる	
40	L5-7	須恵器　蓋	口縁部		①②灰白色(2.5Y7/1)	精緻	
41	L5-4	須恵器　瑞	口縁部		①②褐灰色(5YR5/1)	密:0.1～0.2mmφの砂粒極少量混ざる	
42	ピット1	土師器　埦	口縁部 ～底部	①(15.2) ②5.6③4.9	①②灰白色(2.5Y8/2)	密:0.1～0.5mmφの砂粒極少量混ざる	糸切り痕
43	ピット1	土師器　坏	口縁部 ～底部	①(15.2) ②5.6③(4.4)	①浅黄橙色(10YR8/3) ②浅黄橙色(7.5YR8/4)	密:0.1～2mmφの砂粒極少量混ざる、金雲母混	糸切り痕、no.42と共伴

表3 出土遺物（石器）観察表

法量（ ）は残存値

遺物番号	遺構・層位	器種	形態	法量(mm) ①長さ②幅③厚④重量(g)	石材	備考
44	L6	凹基鏃	三角形	①16.8　②(13.8)　③2.8　④(0.47)	サヌカイト	
45	L4-2	凹基鏃	三角形	①(18.6)　②(14.6)　③3.3　④(0.58)	サヌカイト	

（4）立会調査（図9～11、写真22～29）

調査地区　吉田構内Q-16、R・S・T・U・V-17区　　**調査面積**　280㎡

調査期間　平成23年12月16・19～21・26・27日　平成24年1月5・6日～6月25日

調査担当　横山成己　松浦暢昌

調査結果

特高受変電設備棟建築後の平成23年(2011)12月より、吉田構内東門から新営建物までの配管埋設工事が実施されたため、立会調査を実施した。掘削ルートは総延長280mにも及ぶため、配管掘削の1スパンごとに立会を行い、要所で土層断面図を作成した。土層断面作成ポイントは、A～Hの8箇所である（図9）。

A地点（図10、写真22）では掘削深度が現地表下1.4mに及んだが、造成土中におさまっていた。

B地点（図10、写真23）では掘削深度1.42mであり、現地表下1.16mから①層厚0.14mの黒褐色粘質土（旧耕土）が、その下位に②層厚0.12mの明黄色粘土（旧床土）が、その下位に③青灰色砂礫（河川堆積土か）が確認された。

C地点（図10、写真24）も同様に掘削深度が1.42mであり、現地表下0.42mから①層厚0.15mの黒褐色粘質土（旧耕土）、②層厚0.12mの明黄色粘土（旧床土）、③層厚0.18mの黄褐色粘質土、④層厚0.2mの赤褐色礫混土、⑤層厚0.2mの青灰色礫混土、⑥層厚0.2m以上の褐色砂礫の堆積が確認された。本学移転前は当地点で棚田が形成されていたようで、旧耕土および旧床土は西方に向かい0.4mほど高度を下げている。③層より地山と認識している。

D地点（図10、写真25）は掘削深度1.4mであり、現地表下0.6mから①層厚0.15mの黒褐色粘質土（旧

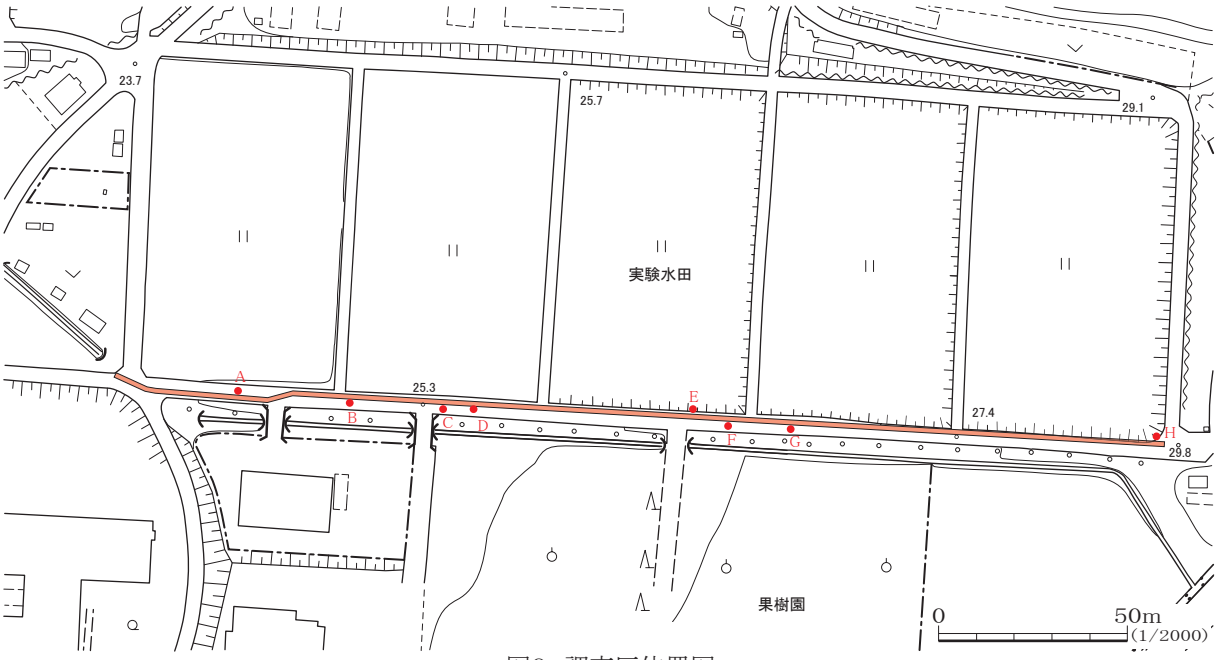


図9　調査区位置図

耕土）、②層厚0.05mの明黄色粘土（旧床土）、③層厚0.2mの黄褐色粘質土、④層厚0.15mの青灰色礫混土、⑤層厚0.25m以上の褐色砂礫の堆積を確認した。C地点からD地点の間で赤褐色礫混土の堆積が途切れるようである。C地点同様、③層以下が地山と認識している。

E地点（図11、写真26）も掘削深度1.4mであり、現地表下1.0mから①層厚0.1mの黒褐色粘質土（旧耕土）、②層厚0.3m以上のオリーブ灰色礫混土を確認した。また、②層を掘り込むかたちで幅0.2mのPit状落ち込みを検出したが、埋土が①層と同一であることから、大学移転前（近代）の耕作にかかわる遺構と見られる。

F地点（図11、写真27）も掘削深度1.4m。現地表下1.02mで①層厚0.18mの黒褐色粘質土（旧耕土）、②層厚0.2mのオリーブ灰色礫混土を確認した。E地点と同様の層序であるが、①層の旧耕土に関し、②層を床として水田が維持できていたのか疑問が残る。

G地点（図11、写真28）も掘削深度1.4m。層序は現地表下1.12mから①層厚0.2mの黒褐色粘質土（旧耕土）、②層厚0.08m以上の青灰色砂礫土である。当地点では、①層上部より掘り込まれた直径約1mの板枠野壺が検出された。埋土からは、近代の磁器（染付け碗）などが出土している。

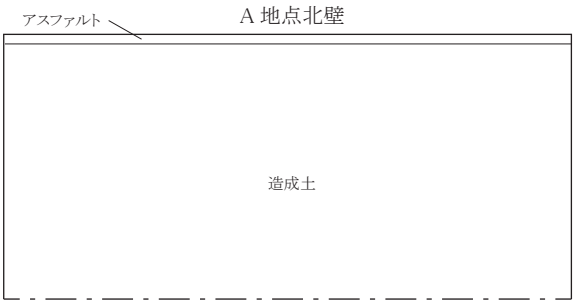
H地点（図11、写真29）は掘削深度1.56mであったが、造成土内におさまっている。

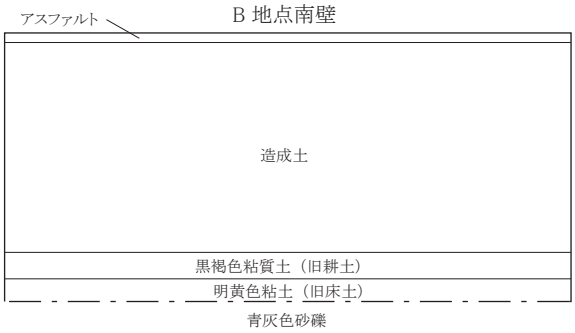
実験水田では、平成9年(1997)に実験水田西部（1号田）において農学部バイオ環境制御施設新営に伴う試掘調査が実施され、河川3条と溝1条などが検出され、円面硯など主として古代の遺物が出土している。[註1] また平成21年(2009)に実験水田北部で実施した立会調査においても河川及び遺物包含層が確認され、古代の遺物が出土している。[註2] 今回は顕著な埋蔵文化財は検出されなかったが、実験水田周域は奈良～平安時代の遺構・遺物が埋存する可能性が極めて高く、今後も慎重な対応が必要である。

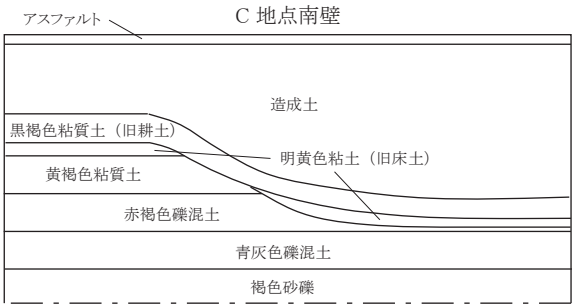
【註】

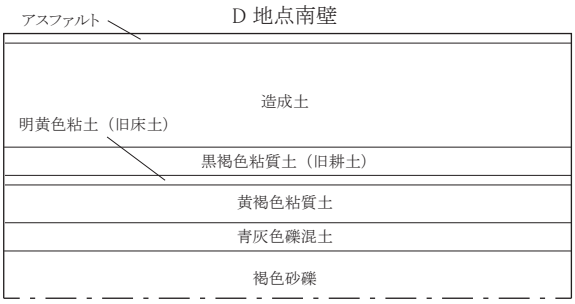
1）田畑直彦（2004）「農学部バイオ環境制御施設新営に伴う試掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報ⅩⅥ・ⅩⅦ』,山口

2）横山成己（2013）「農学部附属農場水田暗渠排水工事に伴う立会調査」,山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学埋蔵文化財資料館年報-平成21年度-』,山口









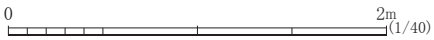


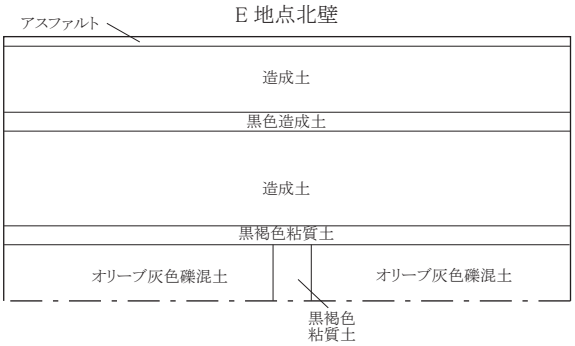
図 10　A ～ D 地点土層断面柱状図

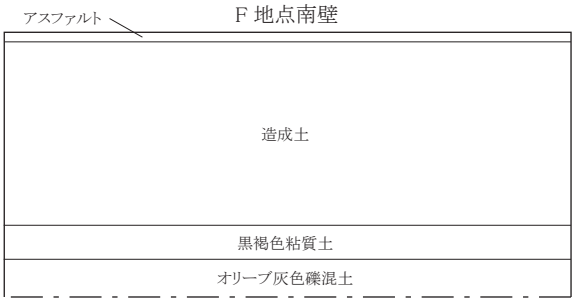
写真 22　A 地点北壁土層断面（南東から）

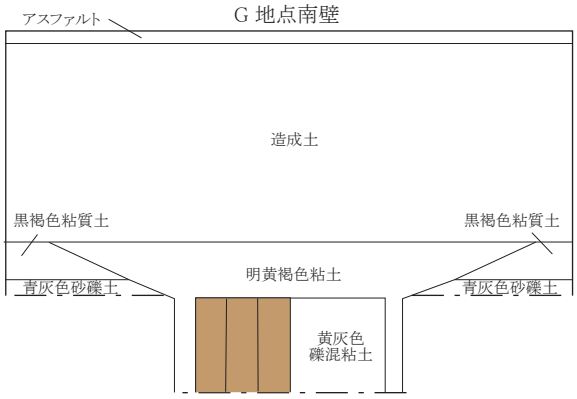
写真 23　B 地点南壁土層断面（北東から）

写真 24　C 地点南壁土層断面（北西から）

写真 25　D 地点南壁土層断面（北東から）







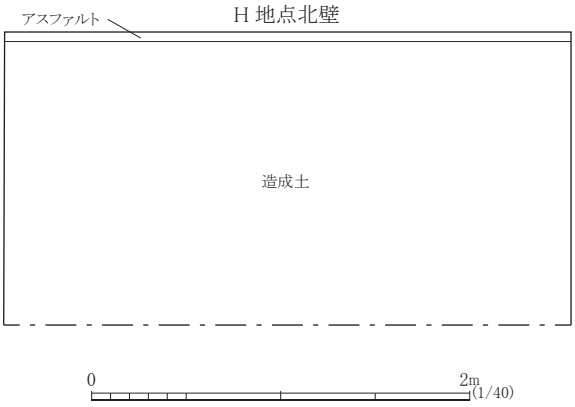


図 11　E ～ H 地点土層断面柱状図

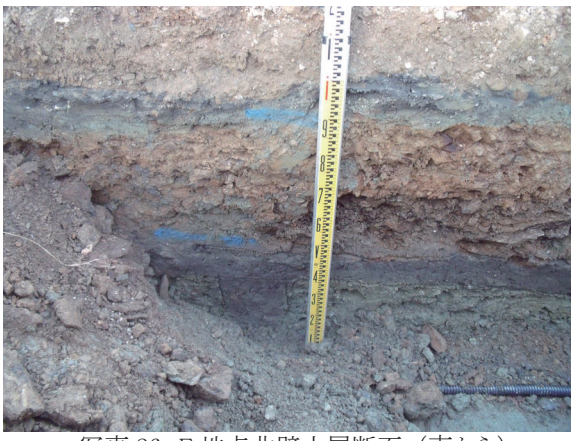


写真 26　E 地点北壁土層断面（南から）

写真 27　F 地点南壁土層断面（北東から）

写真 28　G 地点南壁土層断面（北から）

写真 29　H 地点北壁土層断面（南西から）

2. 基幹環境整備（第1体育館周辺排水整備）工事に伴う立会調査

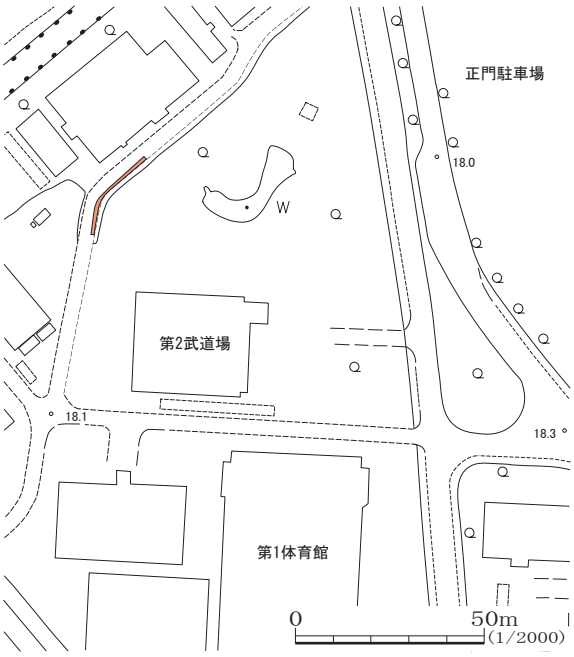


図 12　調査区位置図

写真 30　土層断面（北東から）

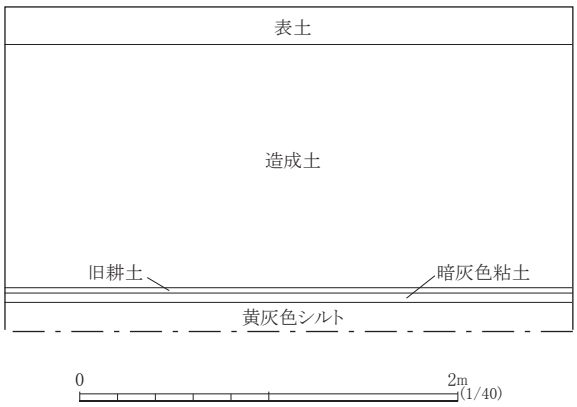


図 13　土層断面柱状図

調査地区　吉田構内G-13・14区

調査面積　72㎡

調査期間　平成24年1月27日

調査担当　横山成己

調査結果

吉田構内北西部に位置する野球場において、排水整備工事が計画された（図12）。当工事は長期計画であり、平成21[註1]・22[註2]年度に引き続く最終年として実施された。

立会は、工事掘削終了時に行った。掘削は現地表下1.7mの規模であり、確認した層序は、①表土（層厚0.2m）、②造成土（層厚1.2m）、③旧耕土（層厚0.05m）、④暗灰色粘土：旧床土（層厚0.1m）、⑤黄灰色シルト（層厚0.15m以上）である（図13、写真30）。

⑤層の締まりは強く、地山と推察されたため、掘削範囲において上層との境界部の断面精査を行ったが、遺構の検出には至らなかった。

3年間に及ぶ立会調査により、排水処理センター周辺の造成土は総じて1m以上と厚く、その下位には旧耕土・床土が埋存していることが明らかとなった。当該地は旧来低地水田であり、大学移転時に大規模な盛土が施されたものと推測される。耕作関連土の下位に遺構が存在するとすれば、遺存状態は良好である可能性が高い。今後も立会調査等による丁寧な遺跡情報の収集が必要である。

【註】

1）横山成己（2013）「基幹環境整備（第1体育館周辺排水整備）工事に伴う立会調査」,山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学埋蔵文化財資料館年報-平成21年度-』,山口

2）横山成己（2014）「基幹環境整備（第1体育館周辺排水整備）工事に伴う立会調査」,山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学埋蔵文化財資料館年報-平成21年度-』,山口

3. 埋蔵文化財資料館スロープ取設工事に伴う立会調査

調査地区　吉田構内N-16区

調査面積　48㎡

調査期間　平成24年2月28日

調査担当　横山成己

調査結果

埋蔵文化財資料館は昭和52年(1977)3月に竣工し[註1]、翌昭和53年(1978)4月に助手1名が配され、本学における埋蔵文化財保護業務を開始した。竣工以来、細かな改修等は行われたが、建物の老朽化は進み、バリアフリー化にも対応できていなかった。

平成23年度、館員の長らくの希望であった建物改修と玄関スロープの取設、トイレのバリアフリー化工事が計画された。スロープ取設に関しては、玄関前の空間を約0.4m掘削することとなった（図14）ため、地下の状況を確認すべく立会調査を実施した。

調査の結果、深度0.4mでは造成土内にとどまったため（図15）、下位の堆積層を確認することはできなかった。館の西に隣接する総合図書館新館の建設に伴う発掘調査[註2]では、南東から北西に走る河川と土壙5基、溝7条が検出されている。その他、館の北を西流する水路（排水溝）の付け替え工事に伴う発掘調査[註3]では、遺構の詳細は不明確であるが、弥生時代から古墳時代を主体とする大量の遺物が出土している。資料館敷地においても地下に埋蔵文化財が遺存する可能性は極めて高い。当地において当館の建て替え計画等が生じた場合は、発掘調査の実施が必須である。

【註】

1）不可解なことに、当館建設に伴い発掘調査が実施された記録は残っていない。

2）河村吉行（1985）「中央図書館増築予定M-16区の発掘調査」，山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅱ』，山口

3）豆谷和之（1993）「吉田遺跡第Ⅰ地区A区の発掘調査」，山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報ⅩⅠ』，山口

図 14　調査区位置図

写真 31　改修工事風景（南西から）

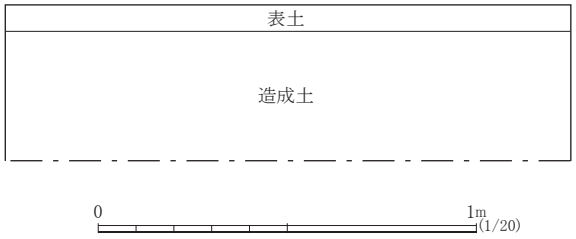


図 15　土層断面柱状図

4. 第2学生食堂西側テーブル・ベンチ取設工事に伴う立会調査

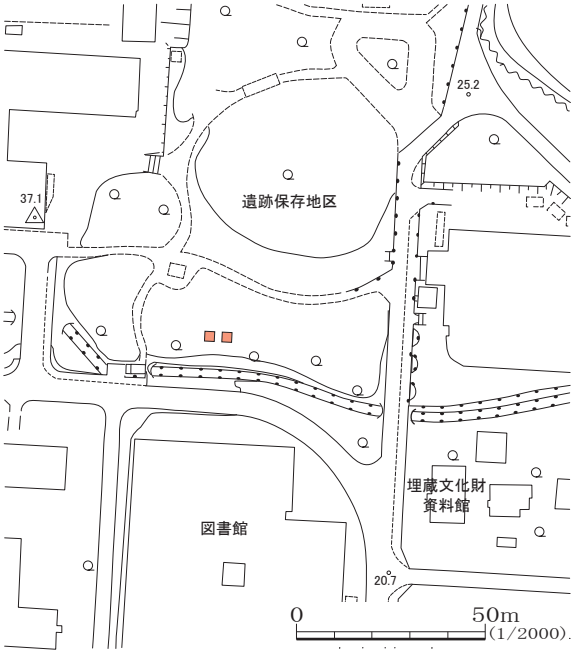


図 16　調査区位置図

写真 32　土層断面（東から）

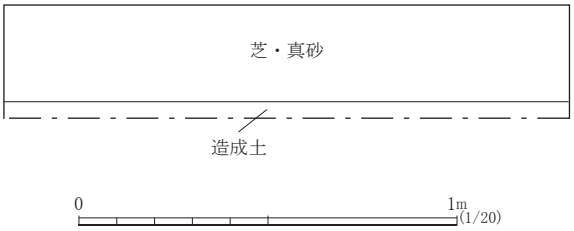


図 17　土層断面柱状図

調査地区　吉田構内M-15区

調査面積　8㎡

調査期間　平成24年3月9日

調査担当　横山成己

調査結果

本学吉田構内には「遺跡保存地区」と呼称される地区が2箇所存在するが、総合図書館北側に位置する遺跡保存地区の南方広場（下段部）において、テーブルとベンチを増設する計画が立案された（図16）。

当地においては、昭和60年(1985)に環境整備伴う試掘調査が実施され、弥生時代から近世にかけての多くの遺構および遺物が確認されている[註1]。当工事計画は掘削深度が0.3mと浅く、造成土内にとどまることが推定されたが、開発予定地が昭和60年調査のDトレンチ（近世埋甕や柱穴、落ち込み等遺構を確認。埋め戻し保存）に一部重複する（図16・図32）ため、慎重を期して工事立会にて対応する運びとなった。

調査の結果、想定の通り掘削は現表土（芝および真砂）と造成土の上端で止まることが確認され（図17、写真32）、地下の遺構に支障は生じなかった。

遺跡保存地区は、現在では主に学生や教職員の憩いの場として活用されているが、本来的には埋蔵文化財という学術資料を未来永劫、後世に継承するという本学の姿勢を具現化した場所である。地区内での花見や宴会を否定する気は無いが、当地区の存在意義を学内にアピールする必要性を感じている。

【註】

1）河村吉行（1986）「吉田構内大学会館環境整備に伴う試掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅴ』,山口

5. 農学部植物工場新設工事に伴う立会調査

調査地区　吉田構内P-15区

調査面積　224㎡

調査期間　平成24年3月21・22日

調査担当　横山成己　松浦暢昌

調査結果

吉田構内東部域において平成21年度に実施した農学部植物工場新営工事に伴う立会調査では、造成土下に遺物包含層の遺存を確認し、主として古代の遺物の出土を見た。[註1]

平成23年度、植物工場の南西隣に新規の植物工場の建設が立案された（図18）。建設予定地は当時畑地であったが、平成21年度同様表土を薄くはぎ取り、盛土を行った上で仮設プレハブを設置すること、さらには新営される工場は10年をめどに撤去される予定であることを鑑み、工事計画地において埋蔵文化財保護対応は立会調査にとどめることが決定された。

工事計画地における地下の掘削は予定通り耕土のすき取りで終了するかに見えたが、既設水道管の位置確認のため開発域の西端部で深掘りが行われることとなった。工事立会に赴いたところ、水道管直下に柱穴が露出していることが確認された。精査を行った結果、深掘り部の層序は①表土（層厚0.2m）、②明黄褐色砂質土（層厚0.3m）、③灰黄色弱粘質土（遺物包含層：層厚0.2m）であることを確認した。遺構は③層下に遺存しており、遺構埋土は黒褐色粘質土である。検出した柱穴は径0.3m以上になるものと推測されることから、当地に大型掘建柱建物が存在する可能性が高まった。

工事における既設水道管の撤去に関しては、管確認位置での切断を打診し、本学施設環境部の理解の下、開発域の既設管は埋蔵文化財保護のため残置することとなった。

【註】

1）横山成己（2013）「農学部植物工場新営工事に伴う立会調査」,山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学埋蔵文化財資料館年報-平成21年度-』,山口

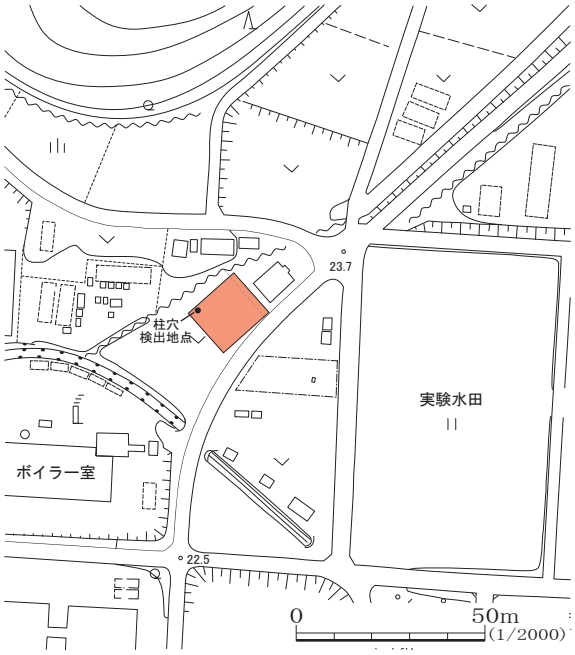


図 18　調査区位置図

写真 33　柱穴検出状況（南から）

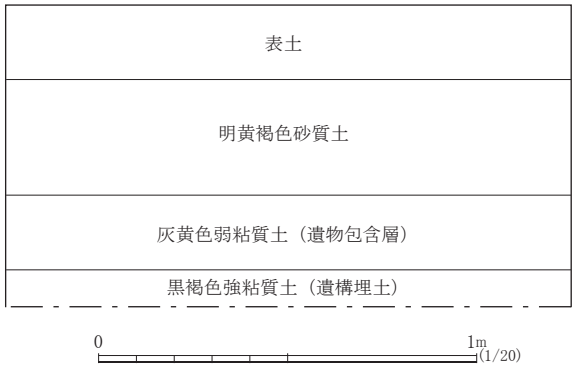


図 19　土層断面柱状図

6. 農学部連合獣医学科棟横倉庫撤去・新設工事に伴う立会調査

図 20　調査区位置図

写真 34　土層断面（北西から）

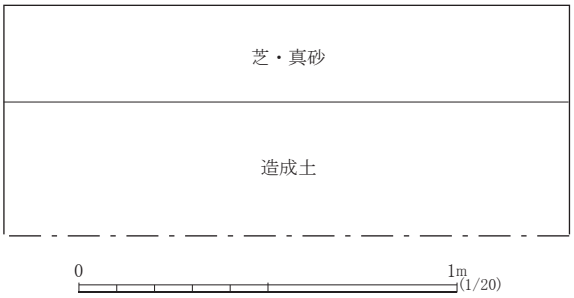


図 21　土層断面柱状図

調査地区　吉田構内O-17区

調査面積　75㎡

調査期間　平成24年3月6日

調査担当　横山成己

調査結果

平成23年度、吉田構内農学部連合獣医学科研究棟北隣に設けられていた倉庫の建て替え工事が計画された（図20）。工事計画における土地の掘削は軽微なものであったが、連合獣医学科研究棟の新営工事に伴う発掘調査においては、縄文時代の遺物を包含する河川が検出されているため[註1]、慎重を期して工事立会を実施する運びとなった。

埋蔵文化財保護に関する文化財保護法書類提出後、久しく当館には工程等に関する連絡が届かなかったが、平成24年(2012)3月6日、工事地が当館に近接することから偶然に着工されていることに気づくこととなった。急遽工事地に赴き、掘削が表土および造成土内に掘削が止まることを確認した（図21、写真34）が、所轄の事務に連絡不足に対する厳重注意を行った。

本学における埋蔵文化財保護対応は古く昭和41年(1966)に始まる。およそ半世紀が経過しているにもかかわらず、未だ学内には周知の埋蔵文化財包蔵地に立地する意識が希薄である。当館の周知不足との批判もあるかもしれないが、教育・研究の場としての本学が社会的地位を保証されるのは、社会に対し誠実にその責任を果たすことにある。今後このようなことがないよう、当館を含め本学が強く自覚すべきと考える。

【註】

1）豆谷和之（1994）「吉田構内農学部連合獣医学科棟新営に伴う発掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報ＸＩＩ』,山口

7. 教育学部特別支援学校散水栓増設工事に伴う立会調査

調査地区　吉田構内C・D-21区

調査面積　約16.8㎡

調査期間　平成23年12月22日

調査担当　田畑直彦

調査結果　特別支援学校で、散水栓増設工事に伴い立会調査を実施した。工事では、管路及び散水栓増設に伴い、幅70㎝、長さ約24mの範囲で現地表下約35㎝まで掘削が行われた。調査の結果、全て造成土の範囲内で埋蔵文化財に支障はなかった。

今回の調査区周辺では、平成9年度の時計塔新設工事に伴う立会調査の際、現地表下約45㎝で、遺物包含層である黒褐色粘質土[註1]が確認されている。また、平成22年度の雨水排水補修工事に伴う立会調査でも現地表下約60㎝で遺物包含層と考えられる黒褐色砂質土及び河川堆積土[註2]が検出されている。以上から、調査区周辺においては、現地表下50～60㎝に遺物包含層が分布する可能性が高いため、今後の開発にあたっては注意が必要である。

【註】

1）田畑直彦（2004）「教育学部附属養護学校時計塔新設工事に伴う立会調査」，山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報ⅩⅥ・ⅩⅦ』，山口

2）横山成己（2014）「教育学部附属特別支援学校雨水排水補修工事に伴う立会調査」山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成22年度－』，山口

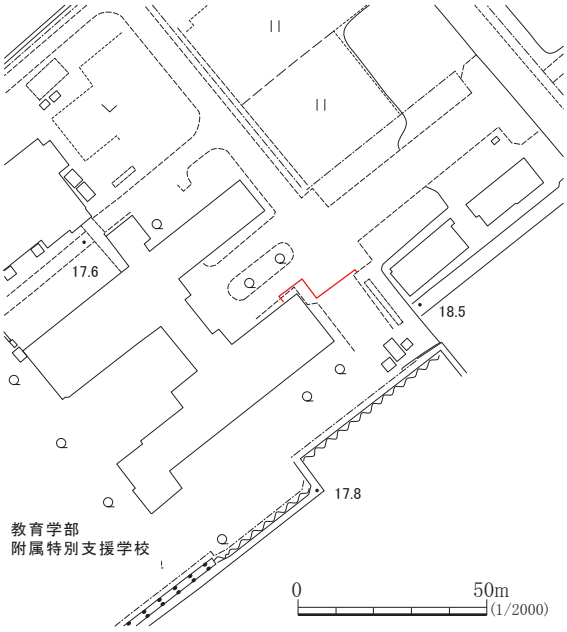


図20 調査区位置図

写真39　調査区全景（北東から）

写真40 調査区土層断面（北西から）